のが好きな子だったので助かりました。
・たまたまうちには兄も帰っていましたが、あのとき私子供だけだったら、多分、ガソリンも並べなかったし、買い出しにも行けませんでした。そのときは、自分のことでいっぱいでした。でも、何日かしたら、通所先か県のほうからか、「お子さん、どうですか」と家のほうに訪ねてくれたみたいです。私はそのときいなかったのですが、様子を聞きに来てくれたと言っていました。
・離れているところでちょいちょい買い物に行けるところではないので、それぞれ宅配がみんな運びました。地区が被災していなかったので、組合長がすごくしっかりしている人で、全部平等で、「支援物資はみんなに分けます」と、一軒一軒みんな分けてくれました。それですごく助かりました。
・備えはしてあったので、ろうそくもあったり、電池もあったりして、何とかかんとか電気が来るまで……。水は、ペットボトルが足りなくなってちょっと困りましたけど、お米も研ぎました。ガスだけはプロパンガスが使えたので、避難したおじいちゃんたちと一緒にご飯を作って食べたりという感じで、うちの子供にすれば、ろうそくの光とかキャンプですから、電気を出したりしてやったら、楽しくできたみたいな感じです。

②避難所

・知り合いのうちとかに行ってお米をいただいたりして、集めたものをみんなで炊いたり、味噌汁を作ったりしました。湧き水のところで洗い物をしたり、きれいな飲める水をいただいたりしました。

③供給

・味噌とか、のりとか、梅干しとかも、家にある分はとりあえずみんな出して、返す分は何合とか、1升とか、何キロとか、あとでくれましたけど、そのときはとりあえずみんな。あとは、農家が多いのでそこに頼んで回してもらいました。結構多いときはおむすびを3千個とか何千個とか、朝5時だか6時から出て、みんなで作りました。
・岩手県内ではもうトップクラスの漁業組合のある地区は、海産物・水産物の漁業でもう十分やっていけるので、災害支援活動も役所より早くやりました。灯油も組合だけ優先で、リッターいくらずつ買えるからという放送というか、消防団の人たちが回って、「この時間に行って詰めてください」というのが流れました。毎日ではありませんが、「入ったので」というのがありました。

6）生活再建

・電気は10日間くらいつかなかった。水道はわりと早く来ました。
・無線が遠くてガス欠で携帯も使えませんでした。
・重度の障害児がいるので、避難所から雇用促進（住宅）に早く入れました。4月10日頃から入居できましたが、子供を連れてくるにはお風呂とかがちょっと狭くて（子供を抱っこして入浴させるため）入れられなかったので、療育センターのほうに半年お願いしまし

た。9月10日にこちらに連れてきて、最初はちょっと慣れませんでしたが、だんだん慣れてきました。今は社協の訪問入浴をお願いして、本当は週1回だけですけど、どうにかお願いして、今は週2回来てもらっています。そのほかに、通所施設で1階お風呂に入れてもらっています。子供に手がかかるので、ご飯の支度やその他の家事は父母にいろいろ手伝ってもらっています。

・市内の仮設とは違って、私たちがいる雇用促進は雇用促進で、管理が別だそうです。雇用促進機構（高齢・障害・求職者雇用支援機構）の管理になっているために、最初は物資が来ませんでした。何カ月かして盛岡市のボランティアさんたちや社協が入るようになってから、タオルとか洗濯とかそういう物資、あとは、盛岡市の野菜が来たかな。そういうのがだんだん入ってくるようになりました。雇用促進の中で自治会のようなものを作りましたが、それがちょっとうまくいかなくて解散しました。そうしたら、「解散するとイベントの情報とか物資とかの受け入れはできない。それでもいいんですか。それでも自治会を解散しますか」と言われましたが、やっぱり仲がちょっとあれだったので、もういいですと。で、市内の仮設での催し物とかイベントに参加したいときは、近くの仮設のところに参加してくださいと。でも、「仮設のイベントに来てもいいですよ」とは言われますが、もともといるところではないので、うちのほうからは誰も行っている様子がありません。

結局、雇用促進もみなし仮設に入るのかな。ですから、その辺は市内の仮設とはやっぱり少し違います。でも、アパートとかそういうところにいる人たちよりは少しはいいみたいです。アパートとか自宅にいた人たちは、物資が何も行かなくて本当に大変だったみたいです。あとからだんだん声が出てきて、ストーブとか、ファンヒーターとか、いろんな物資をだいぶみんなに配布するようにはなりました。

7）障害児者の様子

・子供自身が「ここで（体調を）崩したらだめだ。もう大変だ」と思っていたのか、本当に崩しませんでした。半年いかないまでも本当に何カ月もすごく元気で、ちょっと疲れが出てきたので入院をしましたが、体調は崩しませんでした。

・津波で学校に泊まったすぐ次の日の朝に発作を起こしたそうです。朝と夜にてんかんの薬を飲んでいますが、その薬がありませんでした。そうしたら、宮古病院がかかりつけだからと、担任が朝すぐに行ってお薬を1週間分出してもらったみたいで、薬を飲んだあとはよかったです。療育センターに行って1カ月ちょっとして、4月末に初めて外泊して連れてきましたが、最初に来たときは、やっぱり雇用促進の部屋の中を見ていました。昼寝をしようと寝せたら、いつもだとすぐ寝るのがなかなか寝なくて、部屋をすごいきょろきょろ見ていて、やっと寝たと思ったら、10分もしないでもう発作を起こしました。長い発作だったので、救急車を呼んで宮古病院に行きました。宮古病院に着く頃にはもう30分以上たっていたので気が付いていましたが、小児科の先生が、「様子を見るためにちょっと入院しよう。3、4日泊まれば大丈夫だよ」と言うので泊まりました。あとはずっと元気で、

3日ぐらい入院して、そのあと家で2日ぐらい様子を見て、また療育センターのほうに連れていって、そうしているうちに、4月から学校も転校というかたちにしてもらっていました。それで、高等部の分教室というところが療育センターの中にあって、そこで勉強するような感じでそちらに通っていて、あとは元気です。同じような薬でも何か微妙に成分が違うのか、やっぱり合わないのか、あちらにいる間に何回か頻繁に発作を起こしていたみたいですが、小児科の先生もいるので、まずはそれで対応してくれたようです。こちらに連れてきて宮古病院の薬を飲み始めたら、発作も全然起こさず落ち着いています。

・地震があるたびに目を覚まして大声を上げたりとかは結構続きました。あと、実家が本当に海のそばで、たまたま家は残りましたが、船が全部流されて家業もできなくなりました。私も見せたくないので、通るときはずっと目をつぶっていますが、「流れたね、流れたね」とか、何かやっぱり変だとわかるようです。いつもずっと寝ていて、私も見せたくないので、見せないようにしています。

・次の日、私が夫と迎えに行ったら、やっと帰れるということで、ちょっと落ち着いた顔をして一緒に来ましたが、その当時は車も全く使えないところだったので、歩きながら、「ほら、見なさい。こういう状態だよ」と言ったら、それで初めて自分の目で津波を見て、「ああ、こういうことだったんだね」と。

重度の知的障害があっても、やっぱり違うということで納得したみたいで、うちに帰ってからは、水が出ない、電気がつかないといっても、ろうそくの光をともしながらというのが楽しかったのか何なのか、特にあまりおかしくなることもなくて、何とか生活ができました。

・自宅が大丈夫だったので、子供は自宅待機で、それなりにおとなしくはしていましたが、やっぱりあれは恐怖だったみたいです。1カ月間家にいましたが、その間も言うことは割と聞いて、買い物も手伝っていました。祖父母はもう死んでしまっているので、それでいい経験をしたのかなと思います。

8）事前にやっておけばよかったこと、今心がけていること、その他

・車でどこかを走っているとか何かやっていて、「逃げよう、逃げよう」と言って歩いても、誰も逃げてくれなかったという話をいろいろ聞きます。どこでもいいから、車を降りて高いところに逃げてと。だから、もっとみんな、そういうのを…。そうなったら、もうとにかく逃げなければだめというか、そうすれば、多分もっと助かるというか。みんなも過信していました。

・あんな大変な思いをしたのに、警報とか何かが出ても車で走っている人が今でもいるので不思議です。普通に海のところを走っているので、あまり感じていないのかなと思います。でも、「もう、今度来たら逃げない」とみんな言っています。「逃げる気力も何ももうない。もういい」と言っています。

・うちは小さいときから、震災とか何かがあったらということで、いつも車にいろいろ積

んで歩いていたりとか、非常食とか、いろいろものを蓄えて、避難袋を一人一つずつ用意しています。

・トイレはビニールのあれがあります。合庁のトイレがすぐパニックになって、流れなくなってすごかったです。

・「障碍者の人たちはここかここ」と決めていたとしても、どこにいるかわからないので、まず、とにかく近いところに逃げなければいけません。1回はとにかく近いところに逃げて、そこですぐに決まったところというか、自分が安心できるところに行けるかどうかはわかりません。

2. 岩手・陸前高田市／入所施設

ヒアリング実施日：2012年9月28日
参加者：1名（施設職員）
利用者の障害種別：知的障害
利用者の年齢：成人

概要

高台に位置しており、津波による建物被害や人的被害がなかった障害者入所施設の施設長A氏の対応の記録である。発災後から7月まで一般避難者を受け入れたが、施設内でなく併設する体育館を開放し、互いのルールを作るなどの工夫がなされ、大きなトラブルはなかった。また、精神薬の確保や急病者への対応の難しさ、職員家族の安否確認、直後からの対応による職員のメンタルケアの必要性など課題もあるが、何より、施設が被災せず、職員や利用者が無事であることの重要さが読みとれる。一方、同系列のグループホーム7か所はすべて全壊したため、利用者のための仮住まいの確保や、震災後の環境変化や家族との関係悪化によって新たなグループホーム利用者の増加など新たな課題も見えてきた。

1）発災時の状況と職員の対応

(A) 一つだけ自分の負い目というと変だけども、ちょうどその時間、私いなかったのですよ、この施設に。たまたま私用で盛岡のほうに行っていまして。そこで地震があって、長いゆれだったので、こんな津波までは当然、想定はしませんでしたけども、かなりひどいことになって、建物が壊れたり、なんか大変なことになっているんじゃないかなっていう思いで。実際施設に着いたのが少し薄暗くなってからだから、6時頃ですかね。

それで、体育館があるんですけども、フロアに100人ぐらいいたんですかね。一般の方々、それから通所の事業所があるんですけども、そこも30～40cmぐらいの津波が来たので、その方々もここに避難していました。うちの施設は古いもんですから、毛布や布団などいろんなものをもらってあって。そういうのをどんどん全部出して。

地震でゆれてるうちは、マイクロバスとか、公用車を出して、そこの中で利用者さんを待機させてくれて。車に乗ってると、暖房も効くし。利用者さん、意外に車が好きなので、落ち着いて、黙って乗ってたんです。その後も、利用者さんは本当に寒くて、もちろん夜は電気もないからろうそくだけで。だけど、パニックになる人もないし、いつものように騒いだり、けんかしたりするようなこともなかったし。職員も被災して帰れず残ってましたので、職員がいるっていう安心感もあったりしたのかなって思います。

2）日頃の避難訓練と備え

(A) 避難訓練は年に6回、各月ごとでやってるんですけども。一番多いのは火事を想定した避難がほとんどです。たまには、年に1回は地震で、防御の体勢をとるとか、そういうことも年に1回ぐらいはやっていますけども。ただ、夜中に電気が消えるなど想定した訓練ってのはないです。防御の姿勢をとって、建物が危ないから、別なところに移動しましょうっていうぐらいの訓練で。防御の姿勢も、ほとんどができない方々が多いので、そのときは毛布をかぶせて頭は守ろうかとか。非常食は100備えてあって。入所者は75人定員で当時72～73人いました。一般の避難者は40人ほど。3日分はカレーとかビスケットのような非常食で乗り切った。あとは、おっきな冷凍庫、冷蔵庫があるんですよ。ただ、料理するのにコンロくらいしかなくて苦労しました。

うちのほうは自家水道がありまして、設置当初は市の上水道来てなかったんです。自家水道をそもそも使ってたので、市の水道が来てからも、もちろん水道代が馬鹿にならないので、お風呂とトイレと洗濯は自家水道であるので。ただ、それも電気がないとポンプが動かなくてくみ上げない。14日の夜には電気が来ましたので、トイレも、お風呂もできるようになった。

3）福祉団体等からの人的・物的支援

(A) どんどんどんどん物が、食料が入ってきました。そのほかにも、結構こういう福祉施設だと、いろんな福祉団体にも所属していますので、内陸のほうの施設の方が直接見えられ、その協会のほうからということで、いろんな物は15～16日あたりから入ってくるようになりました。まず物資が来て、トイレットペーパー、ティッシュペーパー、歯磨き、歯ブラシ、あとは紙パンツ、紙オムツ。食料も結構、米などもどんどん持ってきてくれて、最初の頃は食べるものと、普段使うものがもちろん必要で。あと一番は燃料が3月いっぱいぐらいは結構厳しかった。灯油を持ってきてくれるところがあったり、大きなタンクローリーで全部、うちの給油タンクに入れてくれたところもありましたね。また、人的に不足していれば人も派遣しますよと。職員が被災して、帰れないでいたので、当初は応援は受けませんでしたけども、そういう話はずっと早くからありました。

4）職員の被災状況に配慮した勤務体制

家族の安否が取れない職員が多くいました。当然探しに行きたい。だから、そういう人たちはちゃんと、居場所さえはっきりしてもらえば、あとは残ってる人たちに出かけるっていうことをちゃんと告げていけば、本当に勤務関係なくそっちを優先していいからっていうことで、3月中はそうしました。4月1日から、シフトを組んできちっと勤務をやろうということと、あとは、ずっとここで寝泊まりしている人たちもいたので、悪いけども、親戚とか、そういうとこあったら、そちらを頼って、できるだけ通ってくるようにと。4月になったら油も結構補充できるようになったので。やっぱりここだと心身が休まらない

だろうし。

5）利用者家族との安否確認連絡と関わり

(A) これはたぶんどこでもそうでしょうけども、家族と連絡が取れない。結局、施設は大丈夫だよっていうことを連絡が、当時つかないんですよね。たまたま震災の2日目あたりにテレビ局が来て、取材を受けて、あとでテレビ見たよっていう人がいましたけども。だから、家族と連絡が取れないっていうのが、無事なのかそうでないのかが。うちのほうの利用者はもちろん年をとっているので、家族もそれなりに結構高齢の人がいるので、言葉は悪いですけども、預けっぱなしの人が結構多いので。だからといって心配しないわけではないでしょうけども。この辺の人たちが多いので、自分たちも被災していたり、いろんな不便な生活してたはずですので、こっちはこっちに任せてたのかなって思います。何人かは自転車で来た方もいらっしゃったけど。逆にいろんな物資を持ってきてもらったご家族もいますし。

6）精神薬などの医療面からの課題

(A) 当時は電気がなくても、皆さん静かに。夜ももう7～8時になれば床に就くみたいな形で、静かにして。ただ、やっぱりだんだん落ち着いてくれば、普段の生活に戻ってきて、逆に、いろんなトラブルとかなんかが出てくる。寒かったから、特に重度の、障害の重い人たちで、体温調節ができなくて、低体温になって入院した方もいますし、病院に通院した方も。医療的なものが一番大変でしたね。特に精神薬飲んでる人たちが結構いますので。たまたま震災すぐ前に、2週間分とか、1か月分とかもらってる方はいいんですけども。通院先でおくすり手帳をもらって、3回飲むところを2回にしたりと。

7）一般避難者と施設側との連絡調整

(A) 避難している人がいると。いずれ長くなるはずだから、避難者との連絡調整をしなきゃなんないと。変な話、2～3日で帰るわけじゃないから、何か月もいるんだろうからっていうことで。避難者の代表者決めてもらって、この人に言えば、みんなに伝わるように。例えば、救援物資がどんどん施設側の玄関から来て、カップラーメンなどが来る。すると、自分たちのところには来ないと。だから、定期的に打合せをして、お互いに「こういうことはやめてくれ」とか、「こういうものがほしい」とか、うまくいくようになった。

8）外出制限による利用者のストレスへの対応

(A) 定期的にじゃないですけども、結構帰省する人たちもいたのですが、被災して帰れなくなった人がいて不安定になって。1週間、10日ぐらい経って、とにかく町を見せようとドライブしました。施設にいれば、ほとんど何もわかんない状況だし、テレビ見たったって、ぴんと来るわけでもないので。一回は全員、町の状況を見せて、「こうだから、ちょっ

と買い物もできないんだよ」とか、「帰省もちょっと難しくなったんだよ」っていうようなことで理解してもらおうと。

入所している人たちは、外に出て買い物とか、自分の好きなものを食べるとか、そういうのが一番の楽しみなんですよ、ずっとここで生活しているもんだから。ただ、震災前にあったショッピングセンターとか、そういうとこが全部なくなって。当時は仮設のお店も何もないので。がっかりしてしまって。

9）ボランティアによるレクリエーション支援

(A) 順番に、午前中から結構夕方まで、男女一つしかお風呂がないので、男女交互に入るんですけれども。そうすると、やっぱ結構お風呂の時間というのがとられて、職員もとられるので、そうするとその日中の活動というのがどうしても制約される。だから、申し訳ないけれども、自由にしてる時間が結構多かった。

4月中は、日中の活動もほとんどできない状態でしたし、外出できないストレスもあって。いろんな音楽のボランティアさんとか、ピエロみたいなのが来て、風船でみんなと一緒に遊ぶとか、そういうボランティアさんは本当にありがたかったですね。施設から出るのが楽しみですし、あと、いつも同じ顔ぶれなので見ず知らずの人が来るっていうのが、利用者さんには新鮮になりますので。だから、いろんなそういう演芸というのか、大道芸というのか、そういうボランティアさんはありがたかったです。

10）被災したグループホーム利用者のための仮住まいの確保

(A) 震災前、グループホームは6か所あって、28人がそこで生活してて、7か所目は本当に法人の自前で土地を買って、国庫補助をもらって、2月10日に引渡しを受けました。6か所のグループホームは全部、世話人さんは通いで来ていて、ある程度自分のことはそれなりにできる人たちが行ってましたけども、7か所目は本当のケアホームというので、夜も宿直の職員を置いて、結構障害の重い人も入ってもらおうということで、大体人選をしていました。それが7か所目もすべて流されてしまって……。ただ、28人の皆さん、それぞれ日中の活動の場にいましたので、ホームで休んでいた人いなかったので、みんな被災にはあわなかったんです。

震災の後、とりあえずここに避難して、しばらくはここで生活してました。そのうち、内陸部の方は、いったん自宅に戻ってもらって、現在でも4人かな。それぞれ向こうのほうのサービス事業所のグループホームに入ったり、あとは自宅から作業所にかよったり、あと、入所施設を利用したりして。ただ、現在はその後に入所された人もいて、今は25人、グループホームの利用者がいます。6月末に仮設住宅に申し込んで、雇用促進住宅も仮設住宅扱いになってて、震災前に6つグループホームがあったっていうことで、6部屋割り当てになりました。当初は21人の方をその6部屋に振り分けて入ってもらってました。2DKとかで、3人の部屋もあったり、2人の部屋もあったり、ちょっと窮屈な感じでしたが。

あとは、ここの道路の向かいの仮設型の10人入れるグループホームを9月に建ててもらって、雇用促進住宅にいた方々9名がこっちに移動してきて。あと、在宅で過ごしていた人が1人入って10人。雇用促進住宅のほうは一部屋2人ずつになりました。その後、9月に隣町に1か所グループホームを立ち上げて、もともとグループホームで生活していた人が入って。現在は3か所で25人生活しています。

11）グループホームへの利用者増加の背景

(A) 震災後、グループホームへのニーズは増えましたね。震災後4、5人から希望があって、その方々は、直接家が流されたとかじゃないんですけど、たとえば嫁に行った人が家を流されて実家に戻って、ここに一緒にいた人と折り合いが悪くて、結局、グループホームに今、入っている人。あとは、一人暮らししてたんですけども、近くにお店があったのでなんとか一人暮らしできてたけども、結局店も何もなくなったと。普段の買い物も何もできなくなったので、ちょうどうちのほうの通所にかよってきてた人なので、グループホームのほうがいいんじゃないかっていうことで入った人とか。このように、直接的に住むとこなくなったからではなくて、間接的には震災の影響でっていう人が4人か5人ぐらい、やっぱりグループホームに入りましたね。家がなくなったわけでも、面倒を見ていた人が流されてしまったではないんですけどね。いろんな家族間のあれで、本当は別々に住んでたんだけど、一緒に住まなきゃなんなくなって、この人とうまく折り合いが悪くなって、家にいれなくなって…。たぶん前だとある程度大きな家で、自分の部屋があってみたいだけど、それがなくなって、仮設で狭いところに。そうすると、なかなか同じ家族でも、特に障害があるとうまくいかなかったり、やっぱりそうなってくると、グループホームかなんかがいいのにねっていうような人たちがいると思います。

12）職員のメンタルケアの必要性

(A) 職員の中には、家を流されたり、家族を失った人も多い。家を流されるのについては、無責任な言い方をすれば、まだ自分だけじゃないしっていうような思いもあるだろうけど、家族を失った職員も結構いるんです。本当の肉親、親とか、きょうだいとか、子どもを亡くした人もいるし。そういう人たちが普段、何気なくいつものとおりに働いてもらっていますけども、そういう人たちのメンタル的なものが、当初はから心配だなと思って。2回、3回いろんな心理療法士さんに来てもらってお話ししてもらったり、あとは、他都市の保健所の精神科の先生に来てもらって、いろんな団体から手配してもらって、そういうメンタル的な話をしてもらったことはあります。ただ、どんな気持ちで働いているのかなっていうようなのが、ずっと心配でいるんです。

もう一つ、直接的にその被害にあった人たちを見た。要は流されていく人を助けられなくて、見て、当時、そんなの思い出すと夜も寝られんとか、そんな話を聞くと、そういうののメンタル的なものっていうのは、本当にどうすればいいのかなとはずっと思っていま

す。いろんな保健所とかで心の相談みたいな機関もいっぱいあるみたいですけども、本当にもし悩んでるんであれば、そのところに行ってほしいと思うのですが……。

13）被災経験を備えにつなげる

(A) この震災になる前は、こういう避難して来る人なんていうのは、たぶん津波も予想はされていたんですけども、まさかここの施設まで一般の方が避難してくるなんて予想はしてませんでした。さっき言ったように食料も100人分ぐらいの備蓄しかしてませんでしたので。ただ、今回の経験で具体的なことを言えば、食料も100人から150人に増やしたり、備蓄も。あとは、倉庫を買って、毛布とか、発電機とか、いろんな、当時なくて困ったもの。ろうそくとか、電池とかいろんなものを倉庫に入れていますけども。

あと、一番冒頭で話したんですけども、とにかく電気さえあれば、うちのほうの施設は水も使えますし、いろんなことが、普通の生活がどうにかできますので、その発電機。それも大型の発電機と、あとは太陽光のソーラーをなんとかしたいと思って、今、業者さんに見積り取ったり、相談したり。ただ、金額がかなり高くてどうしようかと知恵を絞っているところです。

3. 岩手・陸前高田／相談支援専門員

ヒアリング実施日：2012年9月28日
参加者：1名（相談支援専門員）
利用者の障害種別：知的障害
利用者の年齢：成人

概要

津波被害にあった地域移行支援事務所の相談支援専門員A氏による相談支援業務の実態と課題を記録したものである。発災時には、関連入所施設に自らも避難しながら、一般避難者の遺体安置所や自衛隊風呂へのバス送迎業務を担った。震災から十日後、障害者に関する情報がない中、自らの記憶を辿りながら避難所を廻り、障害者の安否確認とニーズ把握を行った。4月になって、外部支援者の協力を得て相談支援センターを立ち上げ、戸別訪問を開始したが、対応の遅さか相談件数の少なさに不安を覚えた。一方で、もともと地域コミュニティが強く、一般の避難所における障害者の受け入れや理解が進んでいるケースも見られた。就業支援も進んできたが、再び引きこもったり支援員とのかかわりを拒否するケースも出てきており、長期を見据えたかかわりや支援のあり方が問われている。

1）発災時の避難の様子

津波が目前に来ていて、とにかく迂回して、自分の退路を作ってからじゃないと駄目だということで、道路に上がったんですね。隣市のほうから来るこの道路に上がって、次に街を見たときにはもう、がれきの状態だったので、突っ込んでいったらダメだった。とにかく入所の施設のほうに向かって、そこから改めて街を見て、本当にもう全部海の中で、あとはもう火の手が上がって、というふうな状態でね。何をどうしたらいいかも分からない状態で。

暗くなりかけた頃に、避難している人が大勢、施設の周りにいらっしゃるわけです。施設長がいなかったので、我々でまず受け入れることにして、小さい体育館みたいなところで、とにかく夜具を全部あるだけ運べということで。食事もその晩から、少量ではありますけれども、一般の避難者の方にも提供できました。あとは、グループホームは6か所、まだ入ってない新しいところも含めると7か所だったんですけれども、全部流されてしまって。28人の方がグループホームで生活してたんですけれども、その方たちも職員も施設の入所のほうに避難して。ファンヒーターは使えないので、とにかくだるまストーブ2台を使って、1台は体育館のほうの一般の避難者のほうに置いてですね、1台をあと施設の食堂

に置いて。あと炭を一斗缶に入れてたいて少しでも暖を取りました。

グループホームから避難した人のほうが、割と夜具も何とかあったので、たくましさもあったのか、結構休んでいたようですし、あと、施設のほうであと確認されるんだと思うんですけど、騒がしい、パニック状態とかそんな状態はなかったですね。むしろ落ち着いていました。

2）震災から三日目の相談支援業務

三日目、ガソリンが残っていたので、一番気になっていた重度の身体障害の方の安否確認に行ったんですね。隣市のデイサービスセンターを利用しておられ、一人は酸素を使っていた人でした。退院して1か月かそこらくらいだったんですね。これほど大きな災害を想定しておらず、緊急時には、消防署の近くに住んでいるから何とかなるかとか話していたんですけどね。たまたまお二人ともデイサービス利用日に当たっていたということで、被害がなくて、お一方はすぐ病院のほうに搬送されてということでしたし、そこからまた転院されて。もうお一方は電気とか必要ないので、デイサービスのほうでずっと過ごされてたということを確認しました。

3）遺体安置所や自衛隊風呂へのバス送迎業務

電話がダメで、四日目以降はガソリンが切れちゃって。一般避難者の支援ということで、施設とのやり取りとか必要だったので、結局私がそれをやって、運ばれてきた物資を振り分けたり、避難者のお話を聞いて、施設とやり取りしていました。あとは遺体安置所ですね、そこに市民の方を連れて行くということで、それは施設の職員とも交代ではやったんですけども、遺体安置所までの送迎ということですね。それに対しては唯一、自衛隊のほうから軽油のほうの給油を補充をしていただける。実は、私も母親捜さなきゃならなくて、安置所に搬送というのは都合のいいところもあって。生々しくてね。ゴムシートで仕切られて、そこらで洗ったり何なりしてるし。あと、収まりきらなくなって、隣町の小学校が安置所になって、100とか200とかそんな単位でこう、御遺体があるわけですね。皆さんを連れて行って、その間に私も母親捜してということで、すると100単位で全部見なきゃいけないじゃないですかね。小さい子もいて……大変だったですね。においも相当ひどくなってましたしね。

さらに十日目以降は、遺体安置所の送迎と合わせて、自衛隊風呂への送迎も行ってですね。30分の時間で入浴していただいてまた避難所に送るというようなことで、それもうちの職員が交代でバス2台か3台使ってた。お風呂に入ると、もう顔もね、非常に表情も柔らかになっていてね、あとまあ冗談言って、ああ、もうさっぱりした、あといつ死んでもいい、とかって。それぐらい冗談も出るぐらい和やかな感じになってね、日本人にとってお風呂は大事なんだなと。4月になってからの話で、避難所回りとかいろいろ相談に回れるようになったんですけども、一番多いニーズがお風呂だったですかね。

4）データがない中での安否確認

十一日目ぐらいにガソリンが少し手に入って、そこから安否確認ということなんですけども、事務所が流されて、データが全部流されてしまってるので、もう自分の記憶しかないんですよね。あと街はもうなくなっているので、街にいた人はどこに行ってるか分からないしと。避難所を何か所か歩いて、だれそれがいる、というのは確認したりもしたんですけども捉えきれない。なので、津波に合っていない個人、一人暮らしの障害のある方を回るということにして、車にいろいろ支援物資を積んでですね。25日を過ぎてから携帯がつながり始めて、それで初めてほかと連絡が取れるようになって、さらに行動範囲を広げていきました。

5）支援者との連携による相談支援センターの設置と活動

4月5日に県で相談支援センターを沿岸の被害の大きかった地域に作るということで。施設は電波が悪いので、下にある物置のようなところで、かけ下げ付けたところに卓球台を置いて、プリンター一つとパソコン1台置いて。県から事務方一人と、内陸から応援の事務方が一人と、相談員が3名。3泊4日交代くらいで入ってくれて。私たち相談員が4人、手話通訳が1ないし2、事務方二人だから、7名から8名ぐらいが最低のメンバーだったですかね。プラス、県内の自閉症の団体のボランティアさんとか、あとはときに東京都のカウンセラーさんとかが、その関係者が連れてきてボランティアで入ってたり。県からは、どこの避難所に誰がいるかというふうな情報を初めてそこでもらって、それを頼りに回るということにして。まずは施設、避難所の代表者の方に様子を聞くところから始めようと。むしろ本人さんから聞くよりは、周りが困ってるみたいなことでお話も聞けたりというので、それはそれで良かった。ただ、行政としてはやっぱり漏れがあると困るということなので、2順目からは戸別訪問という形でやりました。

その時思ったのが、地域移行支援事業によるコーディネーターの派遣、ベテランの相談員さんたちが来てくれて、私が何とか言わなくても彼らは勝手に動いて打ち合わせしてくれる。その点はすごく大きかったと思います。

6）戸別訪問による相談業務の状況と課題

避難所回りももちろん続けたんですけれども、戸別訪問ということで、津波被害以外のお宅を、手帳持っている方を全戸訪問という形で入って。そのとき知的障害の方と身体障害の方についてはほぼ9割5分ぐらい回れたんですね。その後、精神の方についてどうしようかということで、まず基本的に回ろうと。ただ無理しないという形で、結果的に半分ぐらいですかね。できるだけ大義名分を持って行こうと工夫をして、事務職二人いたので、手帳の再交付とか自立支援の再交付の受付とかですね。その事務方から手帳を預かって、お届けに来ましたということで。結果として、相談そのものは実は多くなかったです。我々が想像していた、もう人手が足りなくて何ともならないとか、そういう状況ではなかった

んです。我々相談員にとってはですね、本当にないのかどうかというところがね。見過ごしているとか、回り方の問題とか聞き方の問題とかいろいろあるんじゃないかということが気にはなりました。

テレビとか新聞の取材があって、自閉症の方がかなりお困りだと思いますけどもと聞かれて。マスコミによれば、我々も動けなかった最初1週間に、避難所で走って怒られて、みたいなお子さんがいたり。また、ダウン症のお母さんがどこにも行けなくて支援学校の前のずっと車の中にいたと言ってたとか。食べるものがなくてひもじくてひもじくて、本当に死ぬんじゃないかと言っていたとか。ただ、我々が別の機会に個別にお話聞いたてみると、もう最初からどこにも行けないと分かってると。だから仲間たちというか、お母さんたちはもう親戚頼って行った、避難所なんか行きませんと。親戚もみんな流されてしまったし、行くところがないから車にいましたと。でもずっといるわけにもいかないし、しょうがないから避難所へ行きました。そしたら体育館で、体育館イコール運動するところなので、いつものとおり走ったと。怒られて、あと布団から出なくなっちゃった、みたいな話なんですね。食い違いがある。ただ、相談してもどうにもならない、障害児の親はもう我慢することに慣れてるし、こんな言葉は十何年間の活動の中で死語だというふうに思ってたんですが、改めてそれを突き付けられて、ちょっとショックなところはありましたね。

7）障害を受け入れるコミュニティ（地域力）の大切さ

外部の社会福祉協議会の評価によれば、サービスとしては小さいけどもある程度整っていて、事業者間の連携もまずまずと。あと地域としてのコミュニティ形成の早さはかなり評価できると言われて。地域力というのが結構あったと。例えば避難所で、アルコール中毒症とか障害者と分かってて受け入れているところもあるんです。こうしたコミュニティ、地域で受け入れようという姿勢はあったのかなと思います。例えばうちの避難所に自閉症の高校生がいたんです。一般の避難の方と7月まで過ごすことができて。お母さんは流されて、お父さんと二人で来たんです。お父さんがお母さんを捜しに行かなきゃいけないので、子供さん一人置いていくわけです。ほぼ独占状態でテレビの前に座って独語をしゃべっている、よくあるパターンかなと思うんですけども。こうしたことが相談という形で出てきてもおかしくないと思ってたら、ずっと7月までね、問題なくそこで過ごしたんですよ。お父さんによれば、面倒見てもらってました、かわいがってもらってました、みたいなことでね。特に周りの方からの苦情というんですかね、そんなことなかったですし。だから、必ずしも自閉症のお子さんだからみんなと一緒にいられなくて、みたいなことでもないんです。

8）障害者に関する情報共有の難しさ

実は避難所にいる時点では、どこに誰がいるかというのは分かってたんですけども、仮設住宅に入ったらまた分からなくなったんです。6月頃、協議会か何かの席で、緊急時と

いうことで情報をもらって。最初は緊急時だからだからもらえたけれども、仮設住宅に入ってまた分からなくなってしまって。9月頃に行政の福祉部局に情報提供をお願いしたんですけども、もはや緊急時ではないから難しいと。例えば、福祉は障害者のデータ、建設に関する部署は仮設住宅入居者に関するデータを持っていて、その辺のところをやり取りしてほしいとお話ししましたが難しかった。障害者に関する調査を独自に行っている外部団体もあって、地元の我々よりも多くの情報を持っていたり。その連携も難しい上に、単年度事業による活動だったりして……。

9）長期を見据えた支援や関わりの課題

全体的なニーズの流れとして、非常時の問題で、お風呂とか何とか本当に目の前のことというふうな部分があって、お風呂とかその物資のこととかがあって、その次には、すぐ出てくる部分では、活動の部分があって、失業した人たちのこととかがあって、掘り起こされた方たちがいて、その方の手帳とか所得補償の部分があってですかね。その失業した方々がまたさらに復職するというふうなことで、そこは就業のほうのワーカーがかかわってます。68人の方が失業して、戻ってる方が40人ぐらいで、辞めた方が全部復職したんじゃなくて新規の方も含めて40ぐらいで。その差が20ぐらいあって全員が就業できた訳ではありませんが、中には順調に戻っている方もいらっしゃるし、これから会社が再興できれば再び雇用するというふうな約束でいらっしゃる方もいるようなので、順調と言えば順調なのかな。ただ、その掘り起こされた方でも、結局また、引きこもってしまったというか、こっちのかかわりを拒否して、みたいなこともあってね。一旦はつながりかけても、また離れてしまって、そういう人に対してどう働きかけるかといった課題が残ってます。復興に向かっていく中で、本当に震災の前々からあった日常的な課題とか、それこそ借金の問題から権利侵害的なことから男女関係のことから何かですね、前々からかかわっていたことに時間を費やしてますかね。

4. 宮城・A町／保護者

ヒアリング実施日：2012年11月3日
参加者：1名（母親）
子どもの障害種別：知的障害
子どもの年齢：成人

概要

宮城・A町で、津波被害により全壊した通所施設（小規模作業所）を利用していた女性の母親へのヒアリング。街の中枢が壊滅的な被害を受けた地域において、娘の安否確認や母子分離の避難生活の困難さ、親族の被害に向き合うことの難しさや孤立による心理的負担などが感じ取れる。

1）被災直後の状況

震災発生時、次女は作業所に行っていた。建物が津波に襲われ、1階にいた次女たちは天井まで20センチの隙間でもがいて助かった。しかし、利用者2名が犠牲になった。次女は、ドアに手が挟まったことで流されずに助かった。

娘を迎えに行ったのは3日後。がれきで車が通れず、その日は娘の姿を見ただけで連れて帰れなかった。翌日、男性4人で担いで連れて帰った。娘は波に飲まれた時の傷や打撲が全身にあり、避難先の高校にあった体操着を下着も着けずに着ていて、暗幕やカーテンにくるまって寒さを凌いでいた。指導員（ママ）は落ち着いていて、「今日の当番は○○だよ」というように、普段の作業所にいる時のように行動したので、誰もパニックを起こさなかった。

2）親族の被災状況と避難生活

私の家族は、嫁いだ長女の家族が4人も行方不明になり、私と長女は遺体安置所になった中学校の近くにある避難所から離れることができなかった。障害のある次女は避難所に連れて行ける状態ではなかったので、次女だけ山の手にある実家に行くことになった。実家には他にも4家族が避難していて、一部屋に何人も一緒に寝るような状況だった。次女は、実家では落ち着かず、夜になると全身で震えたりしたので、私も夜だけ実家に行き、朝に避難所に戻って家族を捜すという生活が続いた。

避難所では食べるものがなく、はじめは1日に小さなおにぎり1個とカンパン3枚だった。さらに、避難所に入っていない人たちも食料を取り来るようになり、避難者の分がなくなるという事態になった。そのうち、食事の配給券を配ることになり、避難者にも食料が行

き渡るようになった。

このような環境で、障害のある子どもが生活できるとは到底思えなかった。また、体育館のような大きい場所では、周りもみな生きるのに一生懸命で、障害のことを理解する余裕などない。障害者が寄り添って避難できる場所が必要だと思った。

3）避難所での心理的孤立

避難所では、私たちもつらい思いをしていた。私と娘は、行方不明になっている家族（娘の夫とその両親、子ども）を捜して日中は方々を歩き回った。日中は避難所にいないことが多く、配給は何ももらえなかった。娘は5人家族中4人がなくなっていて、娘の夫は役場勤めだったので、誰も声も掛けてくれないし、目を合わせてもくれなかった。周囲の視線は「針のむしろ」で、食事をもらいに行くこともできない。被災して家族も亡くした上に、なんでこんなつらい目に遭うのかと……。

天皇陛下が避難所に来て、私の話を聞いてくれた。その時までに家族3人の遺体は見つかったが、孫だけ見つからないと話をした。付き人に促されるまでずっと離れずに話を聞いてくれた。それからは、周囲も声を掛けてくれるようになった。

4）娘の心理的影響

娘は、被災したショックで何もしゃべらなくなった。もともとあまりしゃべる子ではなかったが、波に呑まれた時の話をしたのは3カ月後だった。その後もふさぎ込むことが多くなり、散歩が好きだったが、作業所から帰ってきたら一歩も外に出なくなった。自宅があった場所に一度連れて行ったが、その次からは行かなくなってしまった。仮設住宅は、次女と隣同士で暮らしているが、家族の仏壇がある次女の家には絶対に上がろうとしない。孫のことが好きだったので、思い出すのかもしれない。

避難していた実家にも、行こうとしない。車で一緒に行くと絶対に降りず、2時間でもシートベルトをして待っている。1カ月前には、円形脱毛ができてしまった。うまく説明ができないぶん、何か考えていることがあるのだと思う。

唯一作業所があることで、毎日それが仕事だと思って一生懸命通っている。利用者同士も会えばわいわいと楽しそうで、いまはそれが一番いいのかなと思う。しかし、避難などで利用者が散らばったこと、公共交通機関がなくなったことで、利用者の送迎がとても大変になったようだ。人によっては、往復で1時間かかることもあるようで、ボランティアの力でなんとか送迎しているようだ。

5）被災後の地域と育成会活動

仮設住宅は、私たちの地区は震災前の家の並びに合わせて仮設が割り当てられた。別の地区ではそういった配慮をしなかったことで近隣の関係づくりが問題になっているので、それを考えるといい方法だったと思う。次女のことを知っている人が多いのも助かる。

育成会の会員について、居場所や状況を確認するまでに最終的に1年かかった。遠くに避難した人を探すのが大変だった。震災前はバーベキューやクリスマス会等をやったりしたが、いまはそうしたイベントをやる場所もない。親同士なら話しやすいこともあるのだと思う。特別支援学校や作業所などで親同士が集まると、何時間も話が終わらないこともある。震災後、育成会に入会した人も何人かいた。

体調を崩すお母さんは増えている。集まりなどにまったく出てこなくなった人もいる。子ども同士は集まると楽しそうなのだが、私もそうした様子を見ると自分がむなしくなってきて、一人になりたくなって帰ってきてしまうこともあった。めまいやじんましんにも悩まされるようになった。

5. 宮城・石巻市／保護者

ヒアリング実施日：2012年11月3日
参加者：2名（1組の夫婦）
子どもの障害種別：知的障害、希少疾病
子どもの年齢：成人

概要

同居する知的障害のある息子の両親に、ヒアリングを行った。父親は消防団の一員でもあり、救援活動や避難所運営では夫婦ともに積極的な役割を担った。その間、息子は通所先の施設および病院で過ごすことになる。家族がもつ「地域住民」としての側面およびその責任と、知的障害のある人の支援を担うのは誰なのかという点において、福祉施設の早期運営再開の意義を強く感じさせる。あわせて息子は希少疾病ももっており、被災時における希少疾病の医療的対応や家族としての備えの重要性が感じ取れる。

1）被災直後の状況

地震が起きた時は家にいた。津波が来ることはわかっていたから、妻には近所の人たちを車で避難させるように言い、自分は船を避難させるため何度も往復した。船に乗っている時に津波に襲われ、そのまま海上にいた。日が暮れてから避難所になっている寺に向かった。家族の状況がわからず、「たぶん逃げただろう」と思っていた。

津波により自宅と工場（漁業関係）が被災。通所施設にいた息子を迎えにいくことはできなかった。連絡もとれず、無事なのか確認することもできなかった。「たぶん生きているだろう」という気持ちだった。まさか、通所先の施設がある地区まで津波が行っているとは思わなかったので。

2）消防団活動と息子の安否

地区の避難所になった寺には400人くらいが避難していた。避難所は寺の住職がリーダーになって組織的に運営され、役割を分担した。自分は消防団に所属していたため、避難所から石巻日赤病院まで消防ポンプ車で具合の悪い人や通院する人を、消防団のポンプ車で送り迎えする役割を担った。一日30人前後を送迎したが、当時は混乱していて診療が終わるまで待っていなければならなかった。だから、合間に息子に会いに行くことはなかなかできなかった。

長男の薬は特殊なので、薬が切れないか心配だった。施設のほうで病院に行って薬を確

保してくれた。妻が、避難する時も長男の薬だけは持って逃げた。以前の宮城県沖地震の時の経験で、1カ月分は予備を病院からもらっていた。

3日目くらいに消防車で回る途中で様子を見に行き、その7日くらい後にきちんと会いに行くことができた。施設には電気は来ていなかったが、食料はあった。息子には特殊な持病があり、会った時は顔色が悪く調子が悪そうだった。すぐに病院に連れて行き、そこから仙台の大学病院に行くことになった。珍しい病気なので、大学病院側も受け入れるシミュレーションができていたようで、スムーズだった。息子は4月まで入院し、その後は通所先の施設でしばらく避難生活を送った。

3）避難所の運営と通所先

避難所では、一人ひとりが役割を担わないと運営がうまくいかない。もし、あの時期に息子が施設ではなく私たちと一緒に避難所にいたらと思うと、何も役割を果たせなかったと思う。施設、通所先の機能はとても大事だと思う。避難所は8月まであったが、私たちは3月中には被災した自宅に戻り、避難所と行ったり来たりの生活だった。息子は4月には入院先から戻ってきた。

息子の通っていた施設の法人は、一般の避難者も含めてすべて受け入れた。職員は休む暇もなかったようだが、本当によくやってくれたと感じている。施設によっては「迎えに来てください」という対応のところもあったそうだが、それに比べれば安心だし助かった。

風呂も2日おき、食事も三食、布団で寝られて薬も飲ませてもらって、ここ（避難所・自宅）よりよほど安全な環境だった。いくら心配でも、こっちに連れてくることはできなかった。通所先の施設は、本当にがんばっていた。

通所先は「もっと（施設に）いてもいいですよ」とは言ってくれたが、いつまでも同じようにしてもらうわけにいかないので、連れてきた。蛇田から自宅のほうに来たとたんに、周りの光景を見て黙ってしまった。これで調子がまたおかしくなるのではないかと思ったが、慣れて落ち着いてくれた。津波で窓や壁が壊れ、電気も付かない状態で、本人は嫌だったと思う。

通所先が避難所になっていたため、息子もしばらく通所できずにずっと家にいた。私は、避難所で食事づくりをしていたので、朝早くから夕方まで行ったり来たりで。そんな生活が、避難所が解散するまで5カ月間続いた。

私たちの地区は結束が強くて、息子がいても気が楽だったとは思う。他の地区では、声を出す自閉症の人が周りに怒鳴られたり、障害について説明しても「そんなの関係ない」と言われたり、いろいろなトラブルがあった。本人も大変だが親も大変で、孤立してしまったらどうしようと。

施設は4月半ばに再開した。